

1950年代～1960年代中葉における若泉敬の活動空間 —矢部貞治(1902–1967)との関係を手掛かりに—

後藤 乾一[†]

Wakaizumi Kei's Activities in the Decade between 1952–1967
—With Emphasis on His Relations with
Dr. Yabe Teiji (1902–1967)—

Ken'ichi Goto

In recent years the so-called secret agreements between Japan and the U.S. has become an issue of grave importance in various academic fields and journalism. When the writer published a book (in Japanese) entitled *Life of Wakaizumi Kei Who Shouldered the Secret Okinawa Nuclear Agreement*, highlighting the major role he played in drawing up the text of agreement, he was not able to touch on two points. They are: (1) how did Wakaizumi become a research staff of the Defense Academy after graduating from Tokyo University in 1954, and (2) how he tried to get involved in actual politics in the mid-1960s. The key person in those two moves was Professor Yabe, Teiji a noted political scientist who was old enough to be Wakaizumi's father. The close relationship between the two scholars is clear from the 4-volume *Diary of Teiji Yabe* and six letters of Wakaizumi addressed to Yabe. The writer was not able to introduce these two findings in his earlier book. By the present article the writer has tried to touch on the close relationship between Wakaizumi and Yabe.

はじめに

2009年9月の民主党政権誕生後の一年余、外交・安全保障をめぐる、とりわけ対米関係における「密約問題」が、大きな社会的関心事となった。とくに岡田克也外相（当時）の下で「密約問題に関する外務省有識者委員会」が発足し、その報告書が公にされたこともあり、この問題は関係学界・ジャーナリズムの間でさまざまな議論が交わされた。またそうした中で、国際関係研究者、ジャーナリスト、そして外交当事者による著作、回想録等が相前後して出版されたことも大きな特徴であった。岩波書店の刊行物のみをみても、栗山尚一著（中島琢磨・服部龍二・江藤名保子編）『外交証言録 沖縄返還・日中国交正常化・日米「密約」』、波多野澄雄『歴史としての日米安保条約—機密外交記録が明かす「密約」の虚実』、西山太吉『沖縄密約—「情報犯罪」と日米同盟』、さらには豊田祐基子『「共犯」の同盟史—日米密約と自民党政権』等があげられる。

筆者自身も専門外ではあるが、『「沖縄核密約」を背負って—若泉敬の生涯』（以下『若泉の生涯』と記）

[†] 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

と題する小著を上梓した。沖縄返還をめぐる1969年秋の日米首脳会談において、有事における沖縄への核再持ち込みが「密約」としてR・ニクソン大統領・佐藤栄作両首脳間に交わされたが、その「秘密合意議事録」の草案をH・キッシンジャー大統領補佐官との間で作成したのが当時39歳の国際政治学者若泉敬(1930～1996)であった。その間の経緯を若泉はつとに『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』(文藝春秋, 1994年, 以下『他策』と記)において克明かつ赤裸々に語りつくしたが、その証言内容は歴代自民党政権、外交当局からは黙殺され続けてきた。しかしながら2009年暮、故佐藤首相次男信二氏(元通産相)が、自宅にその「密約」原本を保管していることを初めて明らかにした。最初にこのことを一面トップ大見出しで報じた『読売新聞』(12月22日夕刊)は、「密約の存在を裏付ける決定的な証拠が発見されたことになる」と指摘した。当の佐藤信二氏は「30年来悩んで保管してきたものだった。公表に踏み切った背景には、政権交代によって、民主党が密約の存在の検証に動き始めたことがあった」と吐露した(同12月23日朝刊)。

なお若泉については、このほど森田吉彦著『評伝 若泉敬一愛国の密使』(文藝春秋, 2011)が刊行された事を冒頭に紹介しておきたい。同書は雑誌『諸君!』2008年10月～2009年4月号に連載された論考を集成したものであり、本論で触れる若泉と矢部貞治の関係についても貴重な指摘がなされている。

一. 若泉敬の防衛研修所就職と矢部貞治

『若泉の生涯』の中で筆者は、沖縄返還をめぐる「秘密合意議事録」に深く関与した若泉の壮絶ともいえる生涯を跡付けたが、彼が1954年春東京大学法学部政治学科を卒業後、どのような経緯で設立後まもない、そして一般的にはほとんど無名であった保安庁保安研修所(現防衛省防衛研究所)の教官(助手)に採用されたかについては、ほとんど具体的に記述することが出来なかった。若泉が学生時代から独立後の日本の安全保障に並々ならぬ学術的な関心を有していたことは、彼自身の発言、また彼の親しい学友である矢崎新二(元防衛庁事務次官)、佐々淳行(初代内閣安全保障室長)、粕谷一希(元『中央公論』編集長)等からの証言で理解していたが、それ以上のことは判明しなかった。ところが拙著公開後、一読者の指摘で『矢部貞治日記(全4巻)』(読売新聞社, 1974～75年, 以下『矢部日記』)の中に、保安研修所就職を含め若泉に関する重要な記述が散見することを知った。『矢部日記』全4巻は昭和12(1937)年から昭和42(1967)年の約30年間を対象としたものであり、その史的意義について本書に推薦文を寄せた大河内一男(東京大学学長)は、こう述べている。「これは、単に一人の学者の個人生活の記録というよりは、戦前戦後を通じて大きく揺れ動く日本をどうしたらいいのかを、いまの主体性の稀薄になった日本人全体に考えさせる問題提起の本だ。」

また矢部関連の資料を調べていく内に、港区六本木にある政策研究院大学図書館に「矢部貞治文庫」が存在すること、そしてその中に若泉が矢部に書き送った合計6点の書簡(葉書2枚を含む)が収められているという、私にとっての「新事実」に遭遇した。以下では1950年代初めから60年代半ばに至る冷戦期を背景としつつ、その『矢部日記』および「若泉敬書簡」を素材に、若泉の保安研修所入りの経緯、そして親子ほども年齢の離れた矢部との緊密な交流の一端を明らかにしておきたい。

「大東亜戦争」開戦前30代の若さで近衛文麿の有力ブレーンの一人となり、戦中は海軍省、外務省、

大東亜省の囑託を務めた矢部は、敗戦間もない1945年12月東京大学法学部教授を「依頼免官」となる。「依頼」とはいうものの、実際は当時の政治社会思潮の中で戦時体制の協力者とみなされた矢部には、学内外でかなりの逆風が吹いていたと思われる¹。サンフランシスコ条約発効後の1952年10月17日の『矢部日記』の一節は、そのことに関連したものであろう。若泉も有力メンバーであった東大を中心とする大学横断型の思想サークル土曜会の幹事から憲法改正問題についての講演を求められた矢部は、その日の日記に「これはことわる。僕は憲法改正の推進論ではないし、とくに東大に行くことは感情上も気乗りしない（傍点、引用者）」と率直に語っている。

なお当時矢部は早稲田大学大学院政治学研究科の客員講師を務めていたが、その2年半後の1955年3月には拓殖大学総長・教授に就任、以来数々の政府の審議会委員として多忙な公的生活を再開する。その『矢部日記』に初めて若泉の名が登場するのも、上述の10月17日である。講演依頼に来た土曜会幹事矢崎新二（当時東大法学部4年、卒業後大蔵省勤務）に対し、依頼は断ったものの、「東大学生の敗北主義的考え方を矯正したい」という矢崎に好意を覚えたようで「尚人文科研 [矢部が代表を務めていた] のことも話して、困っている学生に二千元位なら補助していいと言ったら、若泉君と佐々君に話してみるといので、月曜日に研究所で会おうと約した。『時代』という学生の雑誌 [土曜会機関誌] をおいて行った」と手短かに記している。

これを受ける形で2週間後（1952年）10月20日の『矢部日記』に若泉の名が、ふたたび登場する。ただし実際に若泉らが矢部に初めて会ったのは、その半年ほど前の1952年春にさかのぼるとされる。この当時各大学で左派系学生運動が燃えさかるが、これに対し土曜会は「純正学生運動」の立場から真向から対立していた。若泉が顔写真・署名入りで6月3日の『毎日新聞』に、東大内部の「極く少数の一部尖鋭分子」による過激な学生運動に対する「公開状」を寄せたのも、ほぼ同じ時期であった（『若泉の生涯』35-39頁参照）。

矢部は、4月26日の「日記」にこう書いた。「東大、明大、慶大、上智などの学生三、四十人の土曜会というのに憲法改正の問題を話す。天皇制、両院制、自衛力の問題を中心にし、質問討論はこの次にして四時に失敬」。そしてその講演のフォローアップとして、5月2日には「五時に糖業会館 [有楽町、土曜会の顧問格であり矢部とも昭和研究会以来親しかった大山岩雄の事務所があった] に行き、先日の学生土曜会の連中に憲法改正問題で相手になる。色々同じ様な質問をする。天皇制否認論と再軍備反対論が強い。これが現代学生の気持ちだとすると考えさせられることが多い」。

左翼学運動批判の急先鋒であった土曜会が天皇制や再軍備に批判的であったとの指摘は興味を引くが、これら一連の土曜会メンバーとの接触の中に、学部3年生の中心会員若泉も当然含まれていたであろう。福井県の寒村出身の若泉は、同じ日本海に面した鳥取出身で、かつ大学の先輩でもある古武士然とした矢部に、後述のように強く惹かれるものがあつた。そして10月20日、矢部は「日記」にこう書いた。「二時頃出かけて日活会館に行く。東大の学生（矢崎、若泉、佐々、新井 [光]）が既に来てい

¹ 『矢部貞治日記 銀杏の巻』を利用し、昭和戦前期の矢部の思想・行動を論じたものとして伊藤隆『昭和十年代史断章』東京大学出版会、1981年がある。また、秦郁彦は「（矢部は）終戦直後に自ら辞職したが追放は免れ、こんどは『同志の学者を集めて日本再出発のための基本理念』を考究する人文科学研究所を設立……」と指摘している。「戦前期日本の対外膨張主義」『法学紀要』第52巻（2011年3月）、474頁。人文科学研究所（人文科研）については、本頁第2段落でも触れている。

て暫く話す。われわれの研究会には参加させず、多少の学資の援助は考えたいと答えた²。」

これらの記述からうかがえるように、1952年時点では若泉にとって矢部との接触は個人的なものというより、土曜会メンバーとして仲間と一緒に教を乞うという程度の関係であった。その後『矢部日記』に若泉の名はしばらく現れないが、1年後1953年10月20日の『矢部日記』には、彼が講師として深く関わっていた保安庁保安研修所の上級研究員との会合について、こう触れている。「保安研の佐伯[喜一]、石沢[元晴]両君が来て、その車で一緒に渋谷まで行き、東横グリルは僕が食事する間用件を話す。一は委託研究の件、二は僕の講義の件、三は助手推薦の件」。当時の保安研所長は内務官僚出身の北村隆（在任1952年12月～1957年8月）であったが、その意を伝えて信頼する部下の佐伯、石沢に若手スタッフ採用についての推薦を矢部に求めたのであった。

ついで2カ月後、年の瀬もせまった12月22日の『矢部日記』は、こう述べる。「ロンドンから帰った若泉君が来て会う。タバコをみやげにくれた。直ぐ保安研の松谷[誠]さんに電話し[若泉の確認を踏まえた上で]、若泉君をやる」。戦前、陸軍武官補佐官として駐英体験を持つ松谷は、戦後は自衛隊創設にも深く関わった人物であるが、当時は保安研修所の副所長を務めていた³。1952年冬ニューデリーで開かれた国連アジア学生会議への参加に続き、2回目の海外（ヨーロッパ）旅行から帰国した直後の若泉は、翌春に控えた1年遅れの卒業を前に（旧制度による入学者は3年で卒業）、信頼する矢部に自分の“天職”を語りかつ進路につき助言を求め、矢部が保安研修所の件を話したものと思われる。若泉が大いに乗り気で関心を示したことは、翌23日の矢部の「日記」からも明らかである。「早朝若泉君の電話で起こされた。松谷さんと会ったことの報告。万事うまく行くらしい。」

松谷との面談後若泉が保安研修所に就職することを決意するにあたり、矢部貞治の存在が決定的であったことが明らかである。年明け後の1954年1月22日、矢部は「保安研の石沢、星田の両君が来て、若泉推薦の件と、心理戦研究会のことで相談を受ける」と書いていることから、矢部が若泉の将来性を高く評価し、推薦の労をとるに至った経緯がうかがわれる。その推薦状を矢部は、1月24日付でしたためている。正確な就職内定日は明らかでないが、東大の卒業式直後の3月29日（この日は若泉24歳の誕生日でもある）、若泉は留守中の矢部の自宅に、郷里福井から上京した父親喜助を伴い訪問した。その日の『矢部日記』は、短く「それから若泉敬君も父君と一緒に挨拶に来た由」と述べている。喜助は帰郷後すぐに矢部に礼状をしたためたことが、「若泉敬君の父君も福井から挨拶をよこしているので返事」との4月1日の「日記」から判明する。

こうして保安研修所の顧問格であった元東大教授矢部貞治と24歳の新人研究員若泉敬の関係は、より一層緊密なものとなった。矢部も研修所を訪れるたびに、激励をかねて若泉に会ったことが、「日記」からもうかがわれる。たとえば1954年10月28日には「防衛研修所に行った。長谷部陸将補も石沢君も不在、若泉もいなかったが、佐伯君がいたので、用は足りた」とある。その一週間後11月5日には、「中野の星ヶ岡茶寮に行く。丁度夕刊を見る暇があった。防衛研の佐伯君が帰国し、若泉君が近くロンド

² その一週間前の1952年10月13日、元首相芦田均は銀座・交詢社で土曜会メンバーら6人の学生と会食し、活動資金の不足をかこつ彼らに「貧者の一灯を寄附」と約束している（『芦田均日記』岩波書店、1986年）。当時左翼の学生運動に対する鋭い批判者であった土曜会は、ひも付きでない活動資金を獲得するため積極的に活動していたが、芦田均、矢部貞治ら東大法学部の先輩との接触もその一環であった。

³ 森田吉彦『評伝 若泉敬—愛国の密使』文春新書、2011年、77頁。

ンに行くので、僕が主催」とある。翌春には拓殖大学総長となる矢部が、ロンドン大学に留学が決まった青年若泉にかかる期待の大きさが如実に示されている。また入所9カ月で「官費」留学の機会が与えられたことは、研修所首脳の前若泉に対する囑望の表れでもあった。

二. ロンドン、ワシントン留学中の若泉敬と矢部貞治

前述のように矢部貞治は、1955年3月拓殖大学総長に迎えられる。その2カ月後の5月、政治学・行政学の権威でもある矢部は、選挙制度調査会委員（1953年10月囑任）としてイギリスに出張し、同地留学中の若泉と半年ぶりに再会する。空港には日本大使館から高島益郎（後外務事務次官）ら幹部が出迎えるが、矢部は私的に出迎えた若泉と同車、「若泉君と二人きりで乗って話乍らオールドウィッチのウォールドルフ・ホテル」に投宿する（5月20日「日記」）。22日（日）は、終日若泉と気のおけない散策を楽しんだことが「日記」から伝わってくる。「若泉君が来たので、少し選挙の話をし、それから一緒にキュー・ガーデンに行く。直ぐホテルの前からバスの二階に乗って行く。ロンドンの街が一望で見られる」「一旦ホテルに帰って若泉君と防衛研の佐伯君や石沢君、それに木村剛輔などに寄せ書を書いた。」

出張用務を終え帰国を前にした6月3日に矢部は、ふたたび若泉と行を共にしリーゼント・パークの動物園やオックスフォード・サーカスで映画を楽しんでいる。ついで「若泉君を御馳走する意味で、例のYe Olde Cocke Tavernに行く。こゝは他の日本人は知らないようだ。ボーイがディケンスのよく座ったテーブルだというテーブルで夕食。ブドー酒を飲む。それからホテルと一緒に帰り、飛行機で持って帰らない書物を小包で送って貰うよう若泉君を煩わす。こゝで別れた」

矢部は1935年春、32歳の東京帝大助教授時代に2年間アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスに留学したが、それ以降大戦をはさみちょうど20年ぶりのロンドン訪問であり、滞英中の日記も懐旧の念が随所に示されている。帰国後の矢部は6月30日「日記」に「大使館関係で黄田[多喜夫]公使、高島、阿部、須之部書記官[量三、後に外務事務次官]、長谷川官補、毎日の平岡君、読売の清水君、それに若泉君に航空便を出した。一安心」と義理堅く礼状を書き送ったことを記している。また若泉に託した件も、9月11日「ロンドンから送って貰った書物小包、もう一つ届いているので、若泉君にこれで全部着いた旨の絵葉書」を投函している。

以上が『矢部日記』にあらわれるロンドンでの若泉との邂逅であるが、次に滞英中の若泉が矢部に書き送った書簡から、親子ほど年齢差のある両者の親しい間柄の一端を垣間見ておきたい。

現在政策研究院大学図書館に残されている若泉から矢部あて計6通の書簡中最初のもは、ロンドンでの再会から2年後の1957年5月25日付の航空書簡である。留学生活も2年4カ月が経ち核時代における国際政治、イギリスの国防政策を研究していた若泉は、先頃「軍事力の民主主義的統制に関する小論文⁴」を書き終えたことを報告すると共に、「如何なる環境の下でも常に自主独立の気概だけは堅持

⁴ この若泉の小論文とは、彼が英紙『デイリー・テレグラフ』（1957年5月15日付）に寄稿したもので、その切り抜きを同封して矢部に送っている。イギリス社会に向けられたこの小論文の要旨は、戦前の日本は統帥権の独立の下に軍部が政府を支配したが、現在の日本では文官優位の原則が定着しつつあることを具体的な事例を引き合いに紹介したものである。また朝鮮半島やハンガリーおよびスエズをめぐる国際的緊張は、日本国民の目を覚醒させるものであった、したがって多くの日本人は軍国主義の復活には警戒しているが、自衛隊の存在については受け入れているように見える、と結論づけている（この小論文は若泉が英文で発表した最初の論文であり、その記録性に鑑み巻末に訳出資料を付した）。

すべく努めており、また経済的にも自立しております」と近況を伝えている。その他「学生土曜会を宜しく御指導頂きたく特にお願ひ致します」と矢部との最初の出会いの場となった土曜会に思いをはせたり、夏休みは「奨学金」がもらえたら2カ月間アメリカに滞在したいこと、そして11月下旬か12月初めに日本に帰国予定であること等こまかくしたためている。さらに「それから、何時も御配慮わずらわせております防衛庁の方は（つまり小生の留学と研修所との関係は）その後別に問題もありませんので御放念下さい」とも述べている。

この書簡は、当初2年と予定されていたロンドン大学留学を1年間延長したいとの若泉の希望と関連したものである。若泉は期間延長の件を矢部を通じて防衛研修所側に伝えていたことが、前年1956年9月21日の『矢部日記』の次の一節から判明する。「防衛庁で北村研修所長に会う。佐伯君も出て来て、ロンドンの若泉をもう一年留学さすよう頼む。これは快く了承してくれた。彼は休職といっているが北村君はその要はあるまいという」（傍点、引用者）。しかも拓大総長の要職にあったものの矢部は、この朗報を一刻も早くロンドンの若泉に知らせようとしたことが、翌9月22日の「日記」からうかがわれる。「郵便局が午前中しかないので、急いで、ロンドンの若泉に防衛庁で諒解を得たことを知らせ、宮崎公使への礼状とともに航空便で出す。」

1957年5月25日付の書簡から1カ月半後、若泉は矢部に「ロンドン留学中の学生として奨学金」を支給されることが決定し、7月15日アムステルダムから西欧諸国で厳選された数十名の学生と一緒に「アメリカン・サマー・プログラム」に参加できることを、喜びにあふれた筆致で記している。そして「しっかりとアメリカを観てきたいと思っております」と決意のほどを述べるのであった。この初訪米が、その後40年に及ぶ若泉のアメリカとの“運命的”な出会いの第一歩となるのであった。

ロンドンに戻ってからちょうど1カ月後の11月8日、若泉は矢部に3年間の留学を終え年末12月16日午後1時40分羽田着のSAS北回り便で帰国することを伝えると共に、ロンドンでの近況およびアメリカ旅行の一端を若泉独特の丁寧な筆跡でしたためている。27歳の若者らしい歓喜、折り目正しい人柄を伝える資料としてその後半部分を紹介しておきたい。

「去る十月二十九日、ロンドン大学の名誉総長であられるエリザベス皇太后が大学におみえになり、新しい学生会館の開館式が行われました。その際、幸運にも私が外国人学生代表の一人に選ばれ、皇太后に個人的にお目にかかってしばらくお話をすることができました。イギリスでは、単独拜謁を賜ることは非常な名誉とされております。

アメリカからは船で大西洋をわたり、十月の八日にロンドンに帰ってまいりました。話が少し古くなりますが、一寸その御報告を致しますと、今年の夏休み二カ月半に及ぶアメリカ訪問は相当の成果があったと思っております。アメリカ大陸をバスで以て往復横断し、二十余州にわたり約七千マイルを旅行したことになります。滞在した主な所は、カリフォルニア州一カ月、ニューヨーク市三週間、ワシントン一週間、南部各地で十日間その他といった割合で、殆ど全期間アメリカ人の家庭に泊めてもらいました。各地で非常な歓待をうけました。限られた期間でしたけれども、アメリカ人の国民性とか彼らの“生活様式”なるものについて相当突こんで観てきたつもりであります。ニューヨークで

は国連総会を心ゆくまで傍聴し、ワシントンでは国防総省、国務省、アナポリス海軍兵学校などを見学いたしました。カリフォルニアでは求められるままに、「日本の当面する問題と日米関係」について二回ばかり講演をいたしました⁵。いずれその内容をお目にかけて、御批判をいただきたいと存じます。又南部では人種問題についていろんな人々にあって意見をききました。

東京で先生にお目にかかれる日を楽しみにしております。」

この書簡からは、簡潔ながらも1950年代後半の精力的な若泉の行動と関心の所在の一端が窺われる。中でも国際政治学を志す若泉にとっては、冷戦体制下における国際政治の一方の中枢であったアメリカの国務省、国防総省を西欧諸国（多くがNATO加盟国）からの青年と共に見学したことは、3年後のジョンズ・ホプキンス大学への留学とそれを通じての米政界・官界・学界・ジャーナリズムなどの人脈づくりの伏線をなすものとして注目される。

この若泉からの書簡に関連し矢部は、1957年12月19日「日記」に「若泉敬、十六日に羽田に帰着の由」と一言書いている。無名の青年の帰国日をわざわざ記していることから、若泉に対する矢部の親近の情がしのばれる。そして翌1958年正月3日、年賀と帰国の挨拶を兼ね若泉は、世田谷区代田の矢部貞治宅を訪問する。矢部の同日「日記」には「十時半頃若泉敬がやってきて、ロンドンやアメリカの話。向うでハンサード・ソサエティーに払って貰った会費三ポンド半の決済として四千円払う」とある。この1958年以来、若泉は矢部死去の1967年正月までほぼ毎年のように正月には矢部邸を訪ね、彼の門弟・知人らと祝いの盃を酌み交すことになる。また翌年結婚後に杉並区荻窪に家庭を築いた若泉の新居には、毎年正月には土曜会関係者をはじめ親しい知人・友人が多数“押しかける”ことになるが、同じ酒豪で義理人情を重んじる師矢部の習わしを踏襲したものであった。

若泉宅でのこうした宴の一例として、時代は飛ぶが1970年正月の様子をみておきたい。前年秋の日米首脳会談での沖縄返還確定と、それに伴う後々まで彼を苦しめることになる「核密約」への関与を終えた若泉は、こう綴る（『他策』606頁）。

「二日は日頃すっかりご無沙汰していた恩師[矢部は1967年死去]や先輩を訪ね、また三日と四日は若い友人たちを大勢狭い自宅[杉並区桃井]に招待し、大いに盃を酌み交わし、歓談とどまるところがなかった。それまで自制していた酒が、元来好きだけあって、本当に美味かった……私が終始あまりに上機嫌なのを、注意深い人なら若干訝しがったかもしれない。それは過去何年間かの“隠密生活”の一種の反動だったといえるのかもしれないが、想えばまことに嬉しく、記念すべき正月だった。そこには、私なりの新しい希望と人生設計が芽生えていた。」

⁵ その一つであるリバーサイド市のキワニスクラブでの講演では「日米関係の現状」について語っている。そこでは「日本の防衛力の増強に応じ日本本土から米軍が撤退すべき」と主張している。さらに10年後に深く関わることになる米占領下の沖縄について、(1) 共産主義の脅威が極東に存続する限り、沖縄の米軍、その基地は不可欠であるものの、(2) 住民の生活条件改善のために米国はあらゆる努力をすべきこと、(3) 沖縄住民、日本本土の多数の人々が沖縄の施政権返還を希望している等々述べた。若泉敬『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』文藝春秋、1994年、22頁。

ロンドンから帰国後2年近くを経た1959年9月9日、若泉は福井師範学校以来親しく交際してきた同郷の司法修習生（第13期、1962年弁護士登録）根谷ひなをと結婚する。神田学士会館で行われた披露宴は、土曜会関係者はじめ多数の招待客で大盛会であったが、その中に拓大総長、憲法調査会副会長矢部貞治の姿もみられた。その日の「日記」に還暦まじかい矢部はこう記した。

「〔赤坂離宮での憲法調査会の会合から帰宅後〕急いで黒い服を着て先ず日華協力委員会に行き、夕方学士会館の若泉敬の結婚披露に行かねばならぬ。生にくカンカン照りになって黒服が暑い。……どうも暑いのに黒服をきて行ったが多くの方は平服だった。八時半までいやになるほどいろいろ祝辞をきかされた。相当の重労働だ。終わって直ぐタクシーで家まで帰る。夕刊、ハイボール」。

この結婚から1年後の1960年8月、若泉は妻と生後間もない長男耕（現聡一郎）を残し単身米国ジョージ・ホプキンス大学高等国際問題研究所へ研究留学する。この10カ月にわたるワシントン滞在中、若泉はM・マンズフィールド上院議員（後駐日大使）、W・ロストウ国務省政策企画委員長（後大統領特別補佐官）らアメリカ各界の要人と後々まで続く密接な関係を築くことになる。若泉のワシントン生活もすっかり落ち着いた1961年初、矢部は憲法調査会海外調査団長としてワシントンを訪問し、5年半前のロンドンに次ぎ2度目の海外での若泉との出会いを持つことになる。

J・F・ケネディ新大統領の就任式があった1月20日、ホテル・ローズヴェルトで小憩していた矢部は、「日記」にこう書いた。

「間もなく若泉君が迎えにきたので、僕だけ一緒に彼のアパート〔NW地区ワイオミング街1848番43号〕に行く。ホテルから近い。感じのいいアパートで、若泉君がいろいろ支度してくれていた。つまみ物でオールド・パーをやる。二人で殆んど一本あけるくらい飲んだ。テレビでケネディの演説も聞いた。酔って帰ったのは十一時ごろだっただろうか。今夜こそは何も分らずに熟睡した。」

外は厳しい寒気首都ワシントンで心許す若い友人と5時間近くボトル1本をあげ、「天下国家」を論じた様子が伝わってくる。ここだけでなく『矢部日記』には酒仙ともいわれた矢部らしく、ほとんど連日のようにアルコールの話が出てくるのも一興である。

それからまもない1961年5月16日付絵葉書で若泉は、6月中旬に帰国することを矢部に伝えると共に、滞在先のボンからこう近況を書き送った。「私は四月一杯でアメリカの留学生生活を終えまして、五月三日から約十日間ロンドン、そしてベルリンをみて昨夜ボンに参りました。東ベルリンや避難民収容所では、共産主義支配下の生活がいかにみじめなものであるかをまざまざと見せつけられました。」

三. 晩年の矢部貞治と若泉敬

矢部貞治は、10年近く務めた拓殖大学総長を1964年6月61歳で辞する。あわせて教授職からも身を引く。その後約2年教壇から離れたが1966年4月、矢部は早稲田大学政治学研究科客員教授として

ふたたび教育現場に戻った。くしくも若泉が12年間勤務した防衛庁防衛研修所を円満退職し、新設2年目の京都産業大学教授に着任したのと同時期であった。この若泉の第二の人生の幕開けにとっても、矢部の存在は黙視できないものがあつた。その契機は、1965年夏の若泉の矢部家訪問であつた。

8月14日の「日記」に矢部はこう書いた。

「十時ごろ若泉敬がきて、国防問題を政治の舞台に乗せる目的で防衛研修所を辞め、衆議院に出る準備をしたいという話。二回目くらいに当選の目標をおくということ。極めて筋が通っているし困難も十分覚悟しているらしいので、快く諒解した。」

この矢部の記述から分かるように、1960年代半ば外交・安全保障問題の気鋭の論客として大きな脚光を浴びていた若泉は、真剣に政治家への転身を考えていた。R・マクナマラ米国国防長官、D・ラスク国務長官らアメリカ政府要人との単独インタビューを実現させ、それぞれ『中央公論』（1966年9月号）『文藝春秋』（1968年7月号）等の主要メディアに会見記を載せたり、「中国の核武装と日本の安全保障」「核軍縮平和と外交の提唱」と題した長大な巻頭論文を『中央公論』（1966年2月号、1967年3月号）に発表したのも、広く言えば選挙戦略の一環であつた。さらにテレビでの時事討論会に積極的に登場したのも同様であつた⁶。

上述の1965年8月14日『矢部日記』に記された若泉の衆議院選出馬という“決意”は、アメリカ側文書からも裏付けることが出来る。この件に関して若泉自身は『他策』の中で一言も触れていないものの、同年9月彼は親交厚いW・ロストウ大統領特別補佐官を通じジョンソン大統領との面会希望を伝えていた。そのロストウは9月6日付ジャック・ヴァレンティ大統領特別補佐宛て書簡の中で、若泉をこう紹介している（ヴァレンティは大統領と同じテキサス出身、J・F・ケネディのダラス行きに当時副大統領だったジョンソンに同道、暗殺目撃者となった側近中の側近）。

「若泉敬氏は国際関係学専攻の若い日本人大学教授〔実際に教授職につくのは翌春〕であり、政府与党の一員として国会議員に立候補することを真剣に考慮中であります。彼は米日関係を確立し、強化することを熱烈に希求しています。彼は国際親善日本委員会事務局の責任者であり、去る四月の私の日本訪問を実現してくれ、私に一〇日間にわたりベトナムにおける米国の立場を日本の新聞およびテレビ、ならびにあらゆる有力団体の指導者たちに開陳するという得難い機会を与えてくれました。彼はもし短時間でも大統領にお目にかかり一緒に写真を撮る機会が与えられれば、彼の政治的な立場は非常に高められると信じております。私は彼に、大統領の時間がいかに限定されているかを説明し、おそらく面会はできないであろうと示唆しました。一方、……私の個人的判断では、もし大統領がほ

⁶ 当時若泉が出演した主なテレビ番組には次のようなものがある。1966年1月1～3日NHKテレビ討論「日中関係はどうあるべきか」（司会石川忠雄）、1966年4月16日フジテレビ「自民党にもの申す」（他に前尾繁三郎、愛知探一、小汀利得、長谷川周重、大原聡一郎、小山いと子、落合英一、矢部貞治、司会は唐島基智三）、1967年11月3日日本テレビ「ニッポンで合いましょう」（トインビー夫妻とハワイでのインタビュー）1968年9月10日、11日TBSテレビ「おはよう日本」（他に中曽根康弘、大島渚、羽仁五郎ら）。

んの一分でもお会い下さるならば、それは大きな見返りをもたらすこととなるでしょう。また大統領は、日本の若い世代の頭脳明哲で有能な青年との会話に興味をもたれるかもしれません」(傍点—引用者、詳細は後藤乾一『若泉の生涯』165-166頁)。

ジョンソン民主党政権の中枢にあったロストウのこうした尽力にもかかわらず、この時は大統領に面会したいとの若泉35歳の“夢”はかなうことはなかった(ただし翌年7月19日に実現する)。ただ若泉がアメリカにおける“同志”とみなしたロストウに個人的願望を打ち明けていたこと、そしてそれに対してロストウが友情と期待に満ちた支援をしてくれた間の事情が文面から伝わってくる。

このように35歳を過ぎた若泉は、専門とする安全保障・外交問題こそが、日本の真の自立にとって鍵であることを国民世論に訴えるべく政界入りを模索していた。他方そうした折、若泉の前にもう一つの道が提示された。それは前述した京都産業大学教授(東京に置かれた同大学世界問題研究所勤務)というポストであった。しかし当初その地位は、若泉にとって政界進出のための暫定的なものだと認識されていたようであった。その間の事情をうかがわせるものとして『矢部日記』1966年2月9日の次の記述がある。

「今日はバカに暖い。水割りを一杯[矢部は、朝昼晩を問わずさまざまな理由にかこつけアルコールをたしなんでいた]やっていたら若泉敬君が来た。三月に満十二年になる防衛研を辞任し、京都産業大学の教授兼同大学国際問題研究所(在東京)主任として働き、次の次の選挙を目標に郷里で組織活動をやるという計画を、綿密に話して行った。福井の政治家では熊谷太郎氏につきたいということ、財界では小林中、小坂徳三郎に信頼されている由。矢次一夫にも協力を求められている由。オールド・パーを一本おいて行った」(傍点、引用者)。

ここでも述べられているように政界入りを企図した若泉にとって、依拠すべき人物として第一にあげたのが同郷の参議院議員・熊谷組会長熊谷太郎(1906~1992)であった。若泉が熊谷太郎について矢部に話してから1カ月後の3月8日、当の熊谷は「一条で若泉敬、その友人飯島清[政治評論家]と懇談」したこと、その会合は2月15日に次ぐものであり、若泉は「郷土の先輩の私に関心をもっていたらしい」と“以心伝心”的なニュアンスで綴っている。後年の回想であるが熊谷はその席上、「(東大在学中の若泉が)当時の大学を風靡したマルキシズムに根ざす学生運動に敢然として立ち向かう智性と気魄を持つ稀有の存在であったことを知り、心から力強く思うと共に、その彼が同郷人であるということに限りない親しさを覚え、胸襟を開いて語り合った」と述べている。そして、その時以来たびたび同郷の後輩若泉青年と会い、意気投合したことをこう記すのだった。「現在の政界は民主主義勢力対非民主主義勢力の対立であり、之を保守対革新の対立と考えるのは、全くナンセンスという点で完全に考え方が一致した⁷。」

⁷ 熊谷太郎『私の春秋-熊谷太郎自伝』日刊福井、1980年に依拠。「政界進出を視野に入れて具体的に活動」していた当時の若泉については、森田吉彦、前掲書でも言及されている(135-138頁)。

こうした初期の接触をふまえ、両者は「同志をあつめ真の民主主義の推進の方法を練る」べく若泉が呼び集めた10名を核に定期的な研究会を持つことになった。そして若泉の提唱で「諸先生の意見を聴きつつ研究を進める」方針が固まり、「民主主義研究会」（仮称）の旗の下、第一回会合が1968年7月13日、東京工業大学教授桶谷繁雄を講師に「たかの」で開かれた。ついで同年中の講師として若泉の人選で木内信胤、林健太郎、福田恆存といった雑誌『自由』の常連寄稿者である保守論壇を代表する著名な知識人が講師に招かれた。

それ以降もこの研究会は、若泉が東京を離れる直前の1970年代末まで毎月のように講師を招いての会合を重ね、1969年8月には機関誌『民主主義』第1号が刷り上がった。その創刊号第一面には若泉自身が、折からの全国的な“学生の反乱”を取り上げ「許せぬ学生の暴力」と題した評論を寄せた。「民主主義研究会」の基本的性格を見る上で参考として、上述した人物以外の主だった顔触れを「熊谷太郎回想録」によってみておきたい。これらが1960年代末以降約10年間の多彩な若泉の人脈の一つと考えられる。今東光（参議院議員）、橋本恕（外務省中国課長）、平林勉（エネルギー庁石油部計画課長）、山地進（日本経済新聞論説委員）、柴田穂（産経新聞外信部長）、姚孟軒（台湾大学教授）、佐藤正昭（産経新聞外信部員）、小島和義（農林省企画室長）、法眼晋作（国際協力事業団総裁）、中村菊男（慶応大学教授）、村松剛（筑波大学教授）、岩波健一（常陽新聞社長）、森喜朗（内閣官房副長官）等々。

現在、この『民主主義』は管見の限りバックナンバーが確認できないが（熊谷組本社も含め）、熊谷太郎「追悼録」には熊谷自身が執筆した以下の論考4点が収められている（なおこの内、あとの二本は『真の民主主義』に掲載されたものである）。「民主主義と共産主義を区別せよ」（1969年8月）、「保守革新ではなく民主主義・非民主主義の対立」（1969年11月）、「元号反対論の底流」（1979年7月）、「現在の新聞のありかたについて」（1980年11月）。創刊号に寄せた熊谷の上記「民主主義と共産主義を区別せよ」は、その論題が示すように、当時小さからざる影響力をもっていた社会党（現社民党）・共産党が、「民主主義」という言葉を用いて政治活動を展開していることを、「革新などという曖昧なごまかしことばで、安易に共産主義が民主主義にすり換えられている」現状をきびしく批判したものである。この問題意識は、他の論考にも基本的に受け継がれていることは、論題からも明瞭にうかがわれよう⁸。

おわりに

ここでふたたび矢部貞治と若泉敬の関係に戻ることにする。前述したように1965年8月、翌年2月と若泉は敬愛する矢部に政界入りの相談をするが、それ以降は矢部が1967年5月7日に死去したこともあり、立候補に関わる話は『矢部日記』には出てこない。若泉が政界入りの関心をなくしたから、あるいは福井での選挙事情が許さなかったからという諸事由よりも、彼が京都産業大学世界問題研究所を拠点に国際的に存分に活動し得る機会が与えられ、その職務に没頭できたからだと考えられる（『若泉の生涯』第三章参照）。とりわけ1967年9月以来、佐藤首相の私的な特使として沖縄返還日米交渉に水面下で深く関わりを持つようになったことが最大の理由であろう。

⁸ 「熊谷太郎追悼集」編纂委員会編纂『歩み続けて：回想の熊谷太郎』熊谷組、1992。熊谷太郎については、吉村信二氏、釣谷厚子氏より貴重な資料を提供いただいた、記して謝意を表したい。

遺著『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』において若泉は、1967年9月29日、佐藤首相の意をふまえた福田赳夫自民党幹事長から「沖繩問題」への極秘関与を懇望された日をもって、「私の第一の人生は終り、第二の人生が始まったようなものであった」と回顧する[同書、35頁]。そうした中で政界転身という選択肢は、好むと好まざるとにかかわらず消滅せざるを得なかったのである。その「第二の人生」とは、晩年の若泉をしてこう懊悩せざるを得ない峻厳なるものであった(『他策』35頁)。

「一方でいままでどおりの研生活、家庭生活を続けながら、少なくともそう装いながら、他方では同僚にも友人にもそして家族にすら察知されてはならない、隠密で孤独な舞台裏での闘いを同時に遂行する“二重生活”が始まったからである。……事態の進行とともに本格化したこの闘いは、いよいよ“孤軍奮闘”となり、舞台裏に徹すれば徹するほど、完璧な演技と苛酷なまでの能力を要求され始めたのである。それは、内なる自己へ肉薄する怖るべき挑戦でもあった。」

己を滅し「舞台裏に徹す」ることを第一義とする黒子の生活は、魑魅魍魎の政界への進出の前提となる仰々しい選挙運動とは対極にある異界であった。恩師矢部貞治に熱をこめて語った政治の世界は、若泉の視界からいつしか消えていった。より正確に言えば、方途は違えども実現すべき目的という意味では同一であったというべきかもしれない。

37歳となった若泉敬が「第二の人生」に入らんとしていた1967年5月7日、矢部(64歳)は人生の最期を迎える。そしてその年正月2日、『矢部日記』に最後に登場する若泉敬は、こう記されている。

「十一時ごろ若泉敬と、千葉県警交通部長の仲山君が来、続いて奥村[房夫、早大での門下生、拓殖大学教授]、大谷、日下、芹沢、さらに末次一郎その他健青会の連中、佐藤利清、坂田善三郎、子供をつれた丁保安、城田、渡辺などが来た。ジョニ黒二本、赤一本、ナポレオン一本が空になった。」

**資料(注5参照) 若泉敬「日本における軍事力のシビリアン・コントロール」『デイリー・テレグラフ』
1957年5月15日**

ヨーロッパではNATO(北大西洋条約機構)加盟諸国が、西欧防衛のための諸方策の修正に関心を注いでいる一方、日本においてはほとんど知られることなく、しかも理解もされていない防衛力の構築が苦悩のうちに進められている。苦悩のうちにというのは、日本では他の分野の国家的必要性、世論、およびアメリカ型の憲法がすべてこれに反対しているからである。

現在姿を現しつつある真の問題は、民主主義的に統制される諸種の力がこの日本で創出され、維持されるのか、という問題である。大多数の日本人は、いまだに皇軍の将軍たちが政府を己の好むままに動かした戦前の苦い経験を記憶している。軍の指導者たちが、戦前に政府をコントロールし、やがては乗っ取った時に用いた武器は、第1に軍の統帥権の憲法上の独立性であり、これは天皇の直接の統帥権に属するものとされた。また第2は、首相が内閣に現役の将軍を陸海軍大臣として任命するという規定であった。

今日では自衛隊を指揮し統率する最高権力は、内閣総理大臣が握っている。防衛庁は実際は防衛省であるが、そのトップは文民で内閣の一員である。昨年国防会議が内閣内に設置され、内閣総理大臣の統括の下に国家の防衛に関するあらゆる重要な対策について検討することになったが、この組織はアドバイザー委員会としての資格で内閣総理大臣の最高権力が正当に行使されるよう見届ける事も任務の一つである。また自衛隊の必要とする予算はすべて年度ごとに議会で投票に付され、精密な予算が提出されねばならない。国会の同意が得られて初めて総理大臣は、武力による侵略を阻止すべく軍事力で抵抗するよう命じる事ができるのである。

文官が究極的な権限を持つという原則の適用は、文官を防衛庁の重要なポストおよび実戦関係の主要な地位に配置することに明確に現れている。たとえば小滝〔彬〕長官は参議院議員で、長年キャリアの外交官であった。林〔敬三〕陸将は統合幕僚会議の議長であり、現在イギリス政府の賓客としてロンドン滞在中であるが、軍務には1950年についたばかりである。戦前は内務省の官僚であった。

一方、海上自衛隊の幕僚長長田〔澤浩〕海将および航空幕僚長の佐藤〔毅〕空将は、ともに旧帝国海軍の職業軍人であった。専門家でふたたび制服組に戻った人たちはかなり多いが、かつての超国家主義者その他極端なナショナリストがふたたび影響力を握ることのないよう全力をあげて対策が講じられている。朝鮮、ハンガリー、スエズで近年生じた事態は、国民全体、とりわけ知識人、学者の目を開かせる事になった。したがって多くの日本人は軍国主義の復活には敏感であるが、一般的な意見では自衛隊の存在は現在では受け入れられているようにみえる。